

コロナ禍で問い直す新たな教育の可能性
—北九州市立木屋瀬小学校の挑戦を事例として—

Rethinking the Possibility of Education with the coronavirus pandemic:
In case of Koyanose Elementary School

石川 敬之、 湊上 正彦

北九州市立大学 地域創生学群
『地域創生学研究』 第5号 2022年3月

コロナ禍で問い直す新たな教育の可能性

—北九州市立木屋瀬小学校の挑戦を事例として—

Rethinking the Possibility of Education with the coronavirus pandemic:
In case of Koyanose Elementary School

石川 敬之、淵上 正彦*
Takayuki ISHIKAWA, Masahiko FUCHIGAMI

<要旨>

今回のコロナ禍によって学校現場は大きな制約を受けた。本稿で取り上げる木屋瀬小学校でも様々な困難に直面することになったが、その一方で、それを乗り越えようとする同校の思いは新たな発想や価値観の創出につながり、従来の学校現場において当たり前とされてきた慣習を見直す契機となった。そして、その取り組みは子どもたちの学習意欲や主体性、また非認知的能力の育成にもつながっていった。今回のコロナ禍は、その必要性が唱えられながらも取り組むことができなかった教育のアップデートを進めただけでなく、子どもたちが予測困難な時代を生きるために必要な教育のあり方を考える重要な契機となった。

<キーワード>

コロナ禍、豊かな経験、行動変容、共感、主体性、非認知的能力

1. はじめに

1.1 新型コロナと新しい教育：本稿の問題意識

新型コロナの感染拡大は学校現場にも大きな混乱を与えることになった。ただ、今回の経験は、学校での学びについて再検討する機会にもなった。感染防止の取り組みをきっかけに、これまで当たり前だと思われていた価値観が問い直され、学びの意義というものが再定義されることになったからである。そして、これはまた、新たな学びの創造にもつながるものであった。本稿が取り上げるのは、コロナ禍に翻弄されながらも、学びの場としての学校の再開に尽力し、大きな成果を挙げることのできた北九州市立木屋瀬小学校の事例である。木屋瀬小学校の取り組みで特筆すべき点は、新型コロナへの感染対策を進めな

* 北九州市立木屋瀬小学校校長、ソニー科学教育研究会 理事長

がらも従来とは異なる学びを志向し、その実践がなされたところにある。そして、そのことが子どもたちの成長にもつながっていったという点である。木屋瀬小学校のコロナ禍への対応を通じて見いだすことができたのは、これまでの教育のなかで看過されてきたものであり、かつこれからの時代に求められていたものだったのである。以下、本稿では、この木屋瀬小学校のコロナ禍をめぐる対応とそこから生じた教育への新たな取り組みについて具体的に記していく。そして、そうした対応の中で見いだされたこれからの教育のあり方について議論していく。

1.2 本稿の構成

本稿の構成は以下のとおりである。2では、政府によって緊急事態宣言が発出されてからの学校の対応や、そこに現れた課題などを記す。3および4では、木屋瀬小学校における感染防止対策とその取り組みを通じて見えてきた子どもたちの変化について述べる。そして5では、子どもたちの未来に向け、今後どのような教育が必要であるのか、またその教育の可能性とはどのようなものかということについて検討する。

2. コロナ禍の小学校

2.1 緊急事態宣言から全面休校へ

2020年は我々にとってこれまで経験したことのない年になったが、それは学校現場でも同じであった。国内で新型コロナウイルス感染者が200名に達しようとしていた2020年2月27日、政府は全国の小中高に対して緊急の要請を出し、翌週3月2日からの臨時休校を決定した。当然、政府からの要請によって学校現場は混乱に陥った。特にこの時期は卒業式を控えていたため、学校は中止の判断や代替案を考えなければならなかったからである。しかし、本当の困難はまだ到来していなかった。学校はそこから5月31日までの3ヶ月の間、休校を余儀なくされることになる。それはこれまで日本の学校現場が経験したことのない事態であった。

北九州市でも状況は同様であった。北九州市教育委員会は新型コロナウイルス感染症予防に伴い、同日、市立の学校に一斉休校を指示した。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、市内すべての小・中・特別支援学校・高等学校・高等専修学校を令和2年3月2日から3月24日まで（高等・専修は3月19日まで）臨時休校にした。3月25日からは春季休暇となっていたため、実質的には1ヶ月以上の休校となった。

新年度になってからも事態は好転せず、逆に状況は深刻さを増していった。4月7日には政府によって緊急事態宣言を出されたことで、同日から5月6日までの休校延長が決定された。さらに、この緊急事態宣言は期間延長がなされ、休校期間も5月31日までとなるのである¹⁾。

状況に変化の兆しが見られるようになったのは5月中旬以降であった。5月14日に福

岡県が緊急事態宣言の対象地域から外れたことで臨時休校期間が5月24日までに短縮され、5月25日から一斉登校（通常登校）が再開されることになった。ただし午前中（3校時）までの短縮授業であった。その後、5月25日から6月4日までは通常登校が実施されたが、この間、北九州市では13日連続で新型コロナウイルスの感染が確認されたことで、市内の小中学校では再び児童や生徒の分散登校が始まった。最終的に通常登校が再開されたのは6月19日からであり、同月29日からは6校時までの授業も実施され、ようやく休校が要請される前の状態に戻るようになるのである。

2.2 休校期間中の状況

休校期間中、木屋瀬小学校の先生たちの心配は尽きなかった。子どもたちとは、なかなか連絡が取れず、家庭学習の状況や健康面の様子も分からない状態が続いていた。生活習慣が崩れている子どもたちも多くいたはずであった。また、新学期が始まる時期での休校であったため、入学式を行うことさえもできなかった新1年生の状況も心配であった。

もちろん、この時期は教職員も大変な状況にあった。日々の学習課題プリントの作成と印刷、そして配布作業が必要となり、それと並行して1日4回の校区内巡回指導も行われていた。また、木屋瀬小学校では預かり学級を実施していたため、預かり学級が始まる前と終わったあとの消毒作業なども必要であった。さらに学習面での指導だけでなく、職員会議や教育委員会との協議、事務的作業なども増加していた。

もちろん、こうした状況は木屋瀬小学校に限らず、全国の学校でも同様であった。現代学校事務研究会と学校事務法令研究会が共同で実施したアンケート調査からも当時の学校現場の逼迫した様子が確認できる（川崎、2021）。学習課題や連絡配布物の作成、教育委員会等との協議、保護者対応、コロナ関連の文書処理業務の急増、そして、教職員自身も保護者として休校期間中の子どもたちのケアが必要だったのである。

2.3 とめられた学びのなかで見えてきたもの

このように、休校期間中は教職員や子どもたち、また保護者も含め、学校にかかわる人々は混乱とともにあった。さらに言うと、休校要請が解除された後も現場の状況は変わりなかった。むしろ遅れた授業の取り戻し、感染の防止、子どもたちのケア、保護者との連絡、そして数々の事務作業など、すべきことは山積みであった。また感染状況も刻一刻と変わり、その対応にも苦慮していた。明確な答えが見えないことで現場に混乱が生じ、教師も子どもたちも疲弊していたのである。そして現在も多くの学校現場では混乱が続いており、この先もどのようなあり方が求められているのか、その明確な答えは出ていない。

ただ、その一方で、コロナ禍が混乱のみをもたらしたのかと言えば、そうではない。今回のコロナ禍において見えてきたのは、学校という場がいかにかけがえのない場所であったのかということであった。学校は学びの場だけでなく、子どもたちの交流の場、安らぎの場であったことが再認識されたのである。さらに今回の新型コロナの影響は、学びのあ

り方、教育のあり方についても再検討を促すきっかけとなった。学校現場では、制限された状況下でも学びをとめないために何をすべきが検討された。そこではICTなどを使ったオンライン教育の導入といったこともあったが（樋口・堀田、2020）、それよりも、ごく当たり前に続けられていたことがあらためて問い直され、本当の意味で子どもたちの未来のために必要となる学校教育のあり方とは何かということが議論された。つまり、学校とはどういうところで、どのような意味を持ち、子どもたちにどのような知識とスキルをどのように身に付けさせるべきなのか、といったことが問われたのである。以下、本稿が記すのは、こうした問いに真摯に取り組み、優れた成果を遂げた北九州市立木屋瀬小学校の事例である。今回のような予想もしなかった状況の中で、木屋瀬小学校の教職員たちはどのような対応をし、そして実際にどのような成果を出すことができたのか。以下、詳しく見ていくことにする。

3. 木屋瀬小学校の挑戦

3.1 学校の再開

前述のように、北九州市において小学校の休校措置が解除されたのは5月25日からであった。ただ、再開されたとはいえ、当面は分散登校であり、授業も3校時までであった。一斉登校が再開されたのは6月19日からであり、給食開始も6月24日からであった。そして6校時までの通常授業が開始されたのは6月29日からであり、休校要請から4ヶ月もの時間が経っていた。しかし、そうであっても、学校の再開は子どもたちにとって、また教師、保護者にとっても待ちに待ったものであった。

授業の再開に際し、木屋瀬小学校でも様々な準備、対策が行われた。子どもたちが登校してくる前の換気や加湿、消毒に始まり、子どもたちが学校に来ると、通行や並び方を工夫しながら朝の検温・健康チェックが行われた。同時に、授業の実施にあたっても入念な感染対策が行われた。飛沫防止のシールドなどを利用するとともに、必要に応じて席配置の工夫などがなされた。またマスクの着用や手洗い、密を避ける間隔の確保なども徹底された。子どもたちもしっかりと協力してくれたことで、木屋瀬小学校での感染防止は十分に機能した²⁾。

そうしたなか、次なる課題は休校によって遅れた学びを取り戻すことであった。4月の全面休校と5月の分散登校（および短縮授業）によって授業は遅れていた。学習課題は届けられていたものの、この間、子どもたちの勉強時間が十分に確保されていたとは言い難かった。また、実技を伴う音楽や体育の授業などは、ほぼ実施されていなかった。したがって、教室内の感染対策を徹底したうえですみやかに授業を再開していくことが求められていた。

一方、この時に必要とされていたのは授業時間の確保だけではなかった。本当に取り戻さなければならなかったのは学校で過ごす時間であった。つまり、学校で友達と一緒に過

ごし、学び合うことが楽しいという経験そのもの、そして登校を通じた生活習慣の確立が必要であった。実際のところ、子どもたちは3ヶ月もの間、学校生活から離れていたわけであり、授業の遅れを取り戻すことも必要であったが、久しぶりに登校してきた子どもたちにとっては、まずは学びの楽しさを思い出し、そして、生活習慣を立て直すことがより重要だったのである。こういった思いから、木屋瀬小学校では、子どもたちに学校での大切な時間を経験してもらうことに力を注ぐことになった。そして、このことが結果として学校での従来の当たり前を問い直すことにもつながっていったのである。

3.2 木屋瀬小学校の挑戦

では、新型コロナウイルスの感染リスクが依然として懸念されるなかで、木屋瀬小学校は具体的にどのような取り組みを行ったのか。そして、その取り組みは子どもたちに何をもたらしたのか。

まず木屋瀬小学校が取り組んだのは、話し合い時間の確保であった。3ヶ月間ひとりで勉強してきた子どもたちにとって、教室でクラスメイトと一緒に勉強できることは嬉しいことであったに違いない。しかし、学校が始まって黙って先生の話の聞いているだけであれば自宅で受けるオンライン授業と変わらない。したがって木屋瀬小学校では、久しぶりに受ける友達との授業の中で、コロナ禍以前と同じように話し合いや意見交換の時間を取り入れた。学校での学びの意義は友達と一緒に学び合うところにある。そうした思いから、シールドやホワイトボード等を活用した感染対策を十分に行ったうえで話し合いの時間が取り入れられることになったのである（写真1）。



写真1 感染防止対策をしたの話し合いの様子

続いて木屋瀬小学校が行ったのは子ども同士の交流の場をつくるということであった。授業内での話し合いの場をつくることと同様に、休校前には活発に行われていた子どもたち同士の交流イベントを再開させることにしたのである。なかでも特に力を入れたのは、1年生との交流であった。1年生は、入学後、学校に来ることもできなかった。そのため、上級生と仲良くなるのはもちろんのこと、早く学校に慣れ、学校を好きになってもらうための交流会を実施したのである。交流会は学年ごとで1年生と交流するものとなり、各

学年の出し物は、2年生は「しっぽとりゲーム」、3年生は「読み聞かせ」、4年生は「コンサート」、5年生は「風船バレー」、6年生は「玉入れ」であった。各企画とも密にならないように子どもたちが先生と一緒に考えたものであった。また、上級生と下級生が一緒になって実施する新しいタイプの運動会である「スポーツフェスタ」も実施され、ここでも学年を超えた交流が実現された。さらに、学校を超えた交流として、釜石市の小学校とオンラインでの防災学習交流も行われた。これはコロナ禍による制限がきっかけとなって実施された新たな交流であった。こうして木屋瀬小学校の子どもたちはコロナ禍でも交流の機会を得ることができた。また、それぞれの行事に取り組むなかで、同学年の子どもたちとの話し合いや共同作業を行うことができたのである。

最後に、もうひとつ木屋瀬小学校で力を入れたことがあった。それは「豊かな経験をあきらめない」ということであった。言うまでもなく子どもたちの成長には様々な経験が必要である。また、クラスメイトと一緒にそうした経験を得ることで、より多くの喜びや学びがあり、それが子どもたちの成長につながっていく。木屋瀬小学校では、子どもたちにそうした成長のための経験を提供する必要があると考えていた。新型コロナが収束するまで静かに教室で授業を行うのではなく、好奇心と思考力を育むような経験の場を提供することが学校の役割であると考えたのである。そうしたなか、もともと昆虫や植物とのふれあいを大切にしてきた木屋瀬小学校では、コロナ禍においても、その取り組みを継続させた。2年生が1年生を連れて一緒に校庭で虫取りをしたり、捕まえた昆虫を飼育し、その観察日記を書いてもらったりした(写真2)。また、秋には宿泊を伴う自然教室も実施した。自然教室は毎年5年生が参加する1泊2日の校外学習であり、今回も川遊びや天体観察、探検ウォークラリーなどが行われ、子どもたちは自然のなかで貴重な経験をすることができた(写真4)。宿泊や入浴に心配もあったが、教職員による周到的な準備と当日の子どもたちの協力によって、全行程を問題なく実施することができたのである。



写真2 校庭での虫取りの様子



写真3 自然学校での川遊びの様子

3.3 取り組みのなかで見えてきた新たな価値

以上のように、木屋瀬小学校ではコロナ禍でも子どもたちの学びをとめないための取り組みに挑戦してきた。感染リスクがあるからといって活動を自粛するのではなく、学校で

しかできない貴重な経験を子どもたちに提供してきたのである。その結果、こうした取り組みは木屋瀬小学校に新たな光をもたらすことになる。詳細は次章にて説明するが、それは子どもたちの変化、また教師たちの変化であった。子どもたちはコロナ禍でも多くを学び、成長していく姿を見せてくれた。また教師たちも、今回のコロナ禍を通じて学校という存在の意義を再認識するようになった。学校は単に勉強するだけではなく、子どもたちの人間関係を育み、成長を促す場であることにあらためて気づき、そこから学校教育のあり方を問い直し、実践するようになっていったのである。では、そうした木屋瀬小学校の変化とは具体的にどのようなものだったのか。子どもたちや教師にどのような変化があり、またそれはどのような取り組みによってもたらされたのか。そして、そうした変化はこれからの教育を考えるうえでどのような意味を持つことになったのか。以下、それぞれについて見ていくことにする。

4. 変化への胎動

4.1 学校の変化

前章でも見てきたように、今回のコロナ禍は学校現場を翻弄した。教師たちは毎日の授業と並行して感染対策とコロナ禍での学校運営について模索し続けなければならなかった。もちろん木屋瀬小学校も例外ではなく、校長のリーダーシップのもとで毎日議論が重ねられた。ただ、そのような奮闘は、結果として木屋瀬小学校に重要な変化をもたらすことになった。

まず、今回のコロナ禍をきっかけとして、木屋瀬小学校では、それまで慣習的に行われてきた行事やそのプログラムを大幅に変更することになった。コロナ禍では学校行事をどうするのかということが全国の学校を最も悩ませたひとつであったが、これは木屋瀬小学校でもそうであった。学校行事をこれまでと同じように行うのか、それとも中止するのか、もし行うのであれば何を残し、どういった内容をどのような方法で行うのか、といったことを考えなければならなかったわけである。

木屋瀬小学校でも学校行事の取り扱いについては教職員で繰り返し議論がなされることになり、そして、いくつかの学校行事は実際に中止となった。また、実施されることになった行事もその内容が変更されることが多かった。しかしながら、そういった学校行事に関する議論は非常に意義あるものになった。学校行事の実施の是非が問われるなかで、そもそもその行事は本当に実施すべきなのか、またその行事を行うことで他のことにしわ寄せが来ていないか、そして子どもたちの学びに十分に資するものなのか、といったことがあらためて検討されることになったからである。

結果、木屋瀬小学校では、子どもたちに豊かな経験を提供するという視点から、実施する行事を優先的に選択した。例えば、前述の自然教室や1年生との交流会は実施され、また6年生にとっては待望の修学旅行も実施された。また、それと同時に、行事のプログラ

ム自体も十分に見直された。自然教室では、それまで行われていた肝試し大会を映画鑑賞や天体観測会、ナイトウォークなどに変更した。もちろん感染防止対策からの再考であったが、結果として、新たな自然教室では例年よりも多くのプログラムを実施できるようになった。また、修学旅行についても同様であった。県外での宿泊の自粛が求められているなか、例年と同じ旅行先である佐賀・長崎に行くことはできず、県外のテーマパークで遊んだ後は北九州市内に戻り、市内泊での修学旅行を実施することになった。しかし、こうした変更もよい結果をもたらすことになった。あらためて地元の観光名所巡りができたり、向かい合って食事ができないことを利用した、テーブルマナーを学びながらのフルコース料理の夕食を実施するなど、かえって特徴的なプログラムになったのである。

こうして木屋瀬小学校では、今回のコロナ禍をきっかけとして、学校行事がいわば強制的に再構築されることになった³⁾。そして、このことは、我々が学校行事に対して有していた固定観念を気づかせるものになった。教職員が学校行事の実施について議論を重ねていくなかで気づいたことは、学校には毎月何かしらの行事があり、その準備や練習に非常に多くの時間が費やされているということであった。つまり、学校は日々行事に追われていたということであった。これは教師もそうであるし、子どもたちにとってもそうであった。子どもたちの学びや成長にとって学校行事の重要性は大きいですが、行事に追われ、それがプレッシャーやストレスになってしまえば本末転倒となってしまう。薄々は気づいていたことを今回のコロナ禍は我々の前に明示したのであった。

4.2 学習行動における子どもたちの変化

さて、コロナ禍の木屋瀬小学校では、もうひとつ重要な変化が見られた。それは子どもたちの行動変容である。今回のコロナ禍は子どもたちの学習時間削減や学習習慣の確立阻害など、一時的であれ、子どもたちに大きな影響を与えた。また、感染への不安や活動制限がなされた生活のなかでのストレスもあり、メンタルケアが必要なケースも見受けられた⁴⁾。ただ、学校の再開とともに子どもたちの日常が少しずつ戻りはじめると、コロナ禍における学校側の変化とも相まって、良い意味で、それまでとは違った子どもたちの姿が見られるようになったのである。

例えば、コロナ禍での子どもたちの生活態度は落ち着いたものとなった。もちろんこれは、感染防止のために騒がないように求められていたことにもよるが、現場の教師の感覚では、学校行事が少なくなった影響が大きいと感じられた。コロナ禍によって学校行事を減らざるを得なくなったが、そのぶん現場では教師が子どもたちとゆっくり向き合うことができ、コミュニケーションをとる時間も増えることになった。その結果、子どもたちの様子もわかり、必要な対応をとることもできるようになったのである。また、子どもたちも時間に追われることなく、余裕を持って学校生活が送れるようになったのかも知れない。つまり、上述のように、やはりこれまでの学校は運動会や音楽会などの学校行事に追われており、その練習などに時間を割きすぎていたのである。今回のコロナ禍によって学

校行事が少なくなったことで、はじめて落ち着いた学校というものを、子どもたちも、そして教師たちも経験することになり、それが日常の行動にも影響を与えることになったと言えるのである。

もう一点、コロナ禍の木屋瀬小学校では学習面でも子どもたちの変化を感じることができた。具体的には、子どもたちが、より自発的に、また積極的に学びに取り組むようになったということである。そして、このことも、実は学校現場の変化と密接に関連するものであった。例えば、木屋瀬小学校の教師たちは、学校が再開するとコロナ禍によって遅れた子どもたちの学びを取り戻すため、制限された中であったが様々な工夫や取り組みを行うようになった。前章で述べたような自然や生き物と触れ合う機会を積極的に増やすことはそうした取り組みのひとつであったが、その結果、子どもたちの好奇心の高まりや自主的な学びが見られるようになった。教師に言われずとも昆虫の観察日記を書いたり、自由研究を行ったりする子どもたちが多く見られるようになってきたのである（写真4、写真5）。



写真4 一人で作った昆虫標本

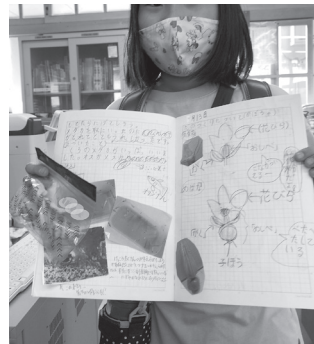


写真5 植物に関する自由研究ノート

他にも、3年生と5年生の教室では後ろの黒板を「はてなボード」として身近な疑問を書けるようにし、子どもたちの知的関心を引き出そうとしていたが、ここでも子どもたちは積極的に知りたいことを書くようになり、また、それを見たもの同士が互いに教え合ったり、議論したりすることも頻繁に起こるようになった（写真6）。

また、こうした姿は日々の勉強に対しても見ることができた。学校再開後、木屋瀬小学校では、子どもたちの学力を上げるための取り組みも積極的に進めており、4年生では漢字テストでクラス全体の点数を上げようとしたり、また5年生でも算数のテストでクラスの総点数を3200点にする「3200プロジェクト」などを実施していた。いずれもクラスのみんなが協力しあうことで学力を上げていこうとするものであったが、そうした中、子どもたちは頑張って勉強したり、お互いに教え合ったりするなどして、クラス全体の点数をあげようと頑張った。そして実際に、そうした取り組みは成果につながり、子どもたちの学力向上が確認されたのである（写真7）。

おそらく、こうした子どもたちの行動は、子どもたち自身が「休校中の勉強の遅れを取り戻そう」と考えて行なったものではなかっただろう（もちろん、そういう思いを持った子もいたと思うが）。そうではなく、むしろコロナ禍における教師たちの思いと取り組みが子どもたちに変化をもたらしたものであると言えよう。ただ、たとえそうであったとしても、子どもたちの学習に対する意欲とその成果が得られたことは事実である。つまり、子どもたちはもともと学びに対する意欲と関心を持っており、それを教師たちの工夫が引き出したと考えられる。このことも、コロナ禍によってもたらされた再発見だったのである。



写真6 「はてなボード」に書かれた疑問について話し合う

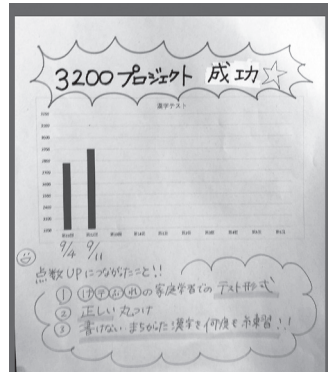


写真7 日頃の勉強への取り組みの成果

4.3 情緒面での子どもたちの変化

最後にもうひとつ、子どもたちの重要な変化を挙げておきたい。それは子どもたちの社会的情緒面での成長である。近年のキーワードで言うならば、子どもたちの非認知的能力の向上である。今回のコロナ禍は子どもたちの心にダメージを与えるものとして考えられていた。しかし、木屋瀬小学校では、従来では見られなかったような子どもたちの心の成長も見られたのである。では、それはどのようなものであったのか。

まずは子どもたちの意欲や積極性の発露である。学校再開後、木屋瀬小学校では、子どもたちにも感染予防の具体的な対策を考えてもらっていた。それはクラス内での取り組みや、委員会活動の場などで実施されていた。そうしたなか、子どもたちはコロナ対策のためのアイデアを積極的に出し、また行動にも移すようになっていった。例えば分散登校が始まった時期、先に登校が始まった6年生は、率先して学校再開の準備や順次登校してくる下級生のために感染防止の手伝いをするようになった。もちろん教師による指導もあったが、子どもたち自身も状況を十分に理解し、学校での感染対策に積極的に協力したのである。また、校内の感染防止活動を推進する立場にある保健委員会のメンバーたちも必要な活動を率先して行うようになった。担当の教師から言われなくとも、分かりやすい手の洗い方を知らせる掲示物を作ったり、石けん液の減り具合を見やすくするための方法など

について活発に議論したりするようになったという（写真8、写真9）。このように、多くの子どもたちがいかにして感染を防止したらよいかということを積極的に考え、それを日頃から実践するようになったのである。



写真8 正しい手の洗い方を伝える



写真9 色を付けた石けん液で滅り具合を確認

さらに、子どもたちのこうした自発的行動は、次なる心の成長をもたらすことになった。それは共感力の醸成である。木屋瀬小学校では、多くの子どもたちが上級生やクラスメイトの自発的な活動を見て同じような行動をとるようになっていったのである。例えば、6年生の中には授業時間の確保のために削減された掃除時間を案じて自発的に昼休みを使って学校のなかを掃除したり、下足室の靴並べをしったりする子どもたちがいたが、そうした活動は少しずつ子どもたちの間に共有されていくことになっていくのである（写真10）。同じく5年生でも、共同で使う学年室の道具を片付ける友だちの姿を見て一緒に片付けてくれる子どもたちが増えていったと言う。さらに、そういう上級生の姿を見た3年生の中にも手洗い場をボランティアで掃除する子どもたちが出てくるのである。これらはまさに、同級生や上級生の行動に共感し、自らも行動しようとした子どもたちの成長の証であると言えるのである。

こうして子どもたちは、これまで経験したことのない状況下においても自分たちに求められていることや自分たちがすべきことをしっかり考え、それを実行していった。これは子どもたちの想像力がもたらしたものであった。コロナ禍では、学校の中で何をすべきかについて、その答えが書かれた教科書はなかった。したがって、子どもたちも必要とされる行動について自ら考えなければならなかった。前章で紹介した1年生との交流会に向けた準備の中でも、子どもたちは、まさに「1年生のために」という思いをもって準備していた。それは子どもたちの感想文からも確認できるものであった（写真11）。もちろん平時であっても1年生のための交流会には同じような思いをもって取り組んでくれただろう。しかし、コロナ禍という状況を理解し、少し不自由な学校生活を送っている自分たちの環境を理解しているからこそ、「1年生のために」という思いはより強くなり、1年生のために何をしてあげるべきかと考えるようになったと思われる。こうして子どもたちの想像力は向上していくことになったのである。まさにコロナ禍という災いが転じて子どもた

ちの心の成長につながっていったのである。



写真 10 お昼休みに自主的に掃除をする子どもたち

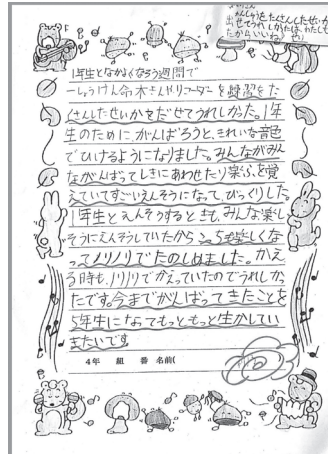


写真 11 1年生との交流会後に書かれた感想文。1年生を思う気持ちが書かれている

4.4 小括

以上、本章で見てきたように、コロナ禍の木屋瀬小学校では様々な場面で従来とは異なる景色を見ることができた。コロナ禍によって学校現場は大きな制約を受けたが、その一方で、それらを乗り越えようとする思いが新たな教育の可能性を気づかせる機会にもなった。それは、これからの社会を生きる我々にとっての光であったかも知れない。もちろん本稿で記述してきたのは木屋瀬小学校の事例であり、安易に一般化することはできない。しかし、ここで見てきたことは全国の学校現場でも観察できたのではないだろうか。コロナ禍は我々に大きな制限をもたらしたが、その制約を乗り越えた先には子どもたちの成長があるということを実感することができた。その意味で今回のコロナ禍は、その必要性が唱えられながらもなかなか取り組む事ができなかった教育のアップデートを否応なく進めたとも言えるのである。

それでは最後に、今回の経験を踏まえてながら、これからの学校教育、そして子どもたちの未来にとって何が必要なのかを考えていく。

5. 未来を生きる子どもたちのために

5.1 新しい学校を創り出す

今回、学校が休校になってあらためて分かったのは学校がもつ価値であった。同じ年齢の子どもたちがひとつの空間に集まり、相互に学び合うことは、子どもたちの主体性や非認知的能力を育成するうえで重要であることを多くの学校はいま一度実感することができ

たと言える。教師の説明を聞いて学ぶだけならオンラインの授業でも可能である。しかし、子どもたちの成長は子どもたち自身が創り出す活動の中にある。身体で感じ、考え、試行錯誤し、失敗に気づくことは学校でしか成し得ないことだったのである。

また、コロナ禍は学校における学びのあり方をも再考させることになった。おそらく今後も今回のような状況に直面することは起こりうる。そうした時に、自分の頭で考えて行動できる力を持った子どもたちを育てることがこれからの学校教育には求められている。子どもにとっての学びとは何か、本当の主体性とは何か、実は子どもたちだけでももっと行動できるのではないか、こういったことを考えなければならないことに学校現場は気づかされたのである。

実際、木屋瀬小学校が感じたこともこうした思いであった。そこで同校では、今回のコロナ禍をきっかけとして、従来の学校行事や授業を新たな視点から見直した。とりわけ、これまで子どもたちが主体となって行ってきたと思い込んでいた学校行事や授業の再検討が行われることになった。例えば、従来の運動会や学習発表会などでは一糸乱れぬダンスや組体操の実技、また優れた合唱や合奏などの披露が目指されてきたが、ともすれば、こうして毎年行われる行事は気づかないうちに昨年との出来栄を比べるものになりがちであった。つまり、子どもたちによって創り出される過程よりも、見せるための結果が重視されるものになっていた。そして、そうであるがゆえに教師主導になる傾向にあった。そこで木屋瀬小学校では、本当の意味で子どもたちの主体性が発揮できる学校行事をつくっていくことにしたのである。例えば今回のコロナ禍で実施された運動会は、これまでと大きく異なるものとなった。新しい運動会では、教師は基本的な方針のみを伝え、子どもたちの自治的運営を促すものであった。その具体的な方針は次のようなものであった。

木屋瀬小学校の新しい運動会『スポーツフェスタ』の開催に向けて

- ① 結果（できれば）よりも、創り出す過程を大切にしたい
- ② 競技内容は先生が決めず、子どもたちがアイデアを出し合いながら決めてほしい
- ③ 走と競遊を組み合わせ、勝ち負けにこだわらず誰もが運動を愉しめる競技を考える
- ④ 1・2年、3・4年、5・6年の組み合わせから、1・6年、2・4年、3・5年に変えて意識を高める
- ⑤ 先生の指示・号令から、プロジェクトリーダー（子ども）の呼びかけで行動する
- ⑥ 2週間毎日練習に浸らず、長いスパンで計画的に取り組み日常の学習を妨げない

教師は子どもたちに、以上6点の条件のみを示し、かつ、これまでは2週間前からの練習漬けで学業が遅れがちになっていたことを反省し、およそ2カ月前から体育の授業時間や休み時間だけを使って準備させることにしたのである。その結果、子どもたちと教師らは、これまでにない経験をすることになった。

まず、子どもたちはそれまで先生の指示のもとで行っていた運動会の運営（競技、放

送、応援、用具の準備など)をすべて自分たちで行うことになったため、とにかく話し合いをし、決定したことを実行しては間違いに気づき、そして、もう一度見直してやってみるという過程を繰り返すことになった。また、教師たちも試行錯誤の連続となった。各プロジェクトの話し合いでは、できるだけ子どもたちが意見を出し合えるような場をつくるため、見守ることに徹することになった。加えて、空き時間を使った話し合いが毎日のように行われるようになったため、教師たちも時間をやりくりしながら付き添うことになった。さらに、子どもたちのトライ&エラーを前提とした取り組みは見通しが立ちにくく、どのような指導が必要なのか、そして実際に成果に結びつくのかも不安であった。しかし、こうした取り組みは見事に実を結ぶことになった。運動会当日には、自ら考えて動く子どもたちの姿があった。何が正解か分からないからこそ、子どもたちは自ら判断し、皆で助け合いながら自分たちの運動会をつくりあげていった。そこには、これまでの教師主導では見ることができなかった、まさに主体性を発揮する子どもたちの成長があったのである⁵⁾。学校行事では、やはり子どもたちが主役であり、子どもたち自身が考え、失敗しながら創り出す経験が重要であった。結果よりも過程に重きを置くことが検証された瞬間であった⁶⁾。

また、子どもたちの主体性の問題は授業においても存在していた。学校の各教科・領域には学習到達目標があるため、授業では子どもたちに学習内容を身につけさせることが優先される。そのため教師は教えることに注力し、子どもたちも受け身になってしまう傾向にあった。しかし、これでは自ら困難を切り開く力をつけさせることは難しい。そこで木屋瀬小学校では、前章で述べたような、知識や技能を獲得するだけでなく、間違えること、見直すこともできる授業、さらには自ら問題意識を持ち、間違えながらも探究的に課題解決に取り組めるような授業が目指されることになった。すると、ここでも子どもたちの学びに対する意欲と関心を引き出せることができ、教師らは子どもたちの変化を目の当たりにすることができたのである。

以上のように、木屋瀬小学校ではこれまでの学校のあり方を問い直し、新しい学校を創り出すための改革に取り組んだ。その改革の柱は、自己認識、自己決定、自己創出であった。子どもたち自らが探索し、判断し、そして行動できるような行事や授業づくりが目指された。それは、子どもたち自身に自己決定のチャンスを与え、もし間違っただとしても見直していくことを見守り、人に頼らず、自ら危機に対応できる子どもたちを育てようとする挑戦であった。コロナ禍における行事改革は感染防止への対応を合わさって二重の苦しみとなったが、それでも木屋瀬小学校の取り組みは今しかできないやりのあるものとなり、教師たちにとっても確かな手ごたえがあった。「これまでゴールは一つだった。しかし、ゴールはいくつあってもよい。一人ひとりの得手不得手は異なる。今後も一人ひとりの良さが活きる学校にしなくてはならない。」職員会でまとめられた教師の提言である。

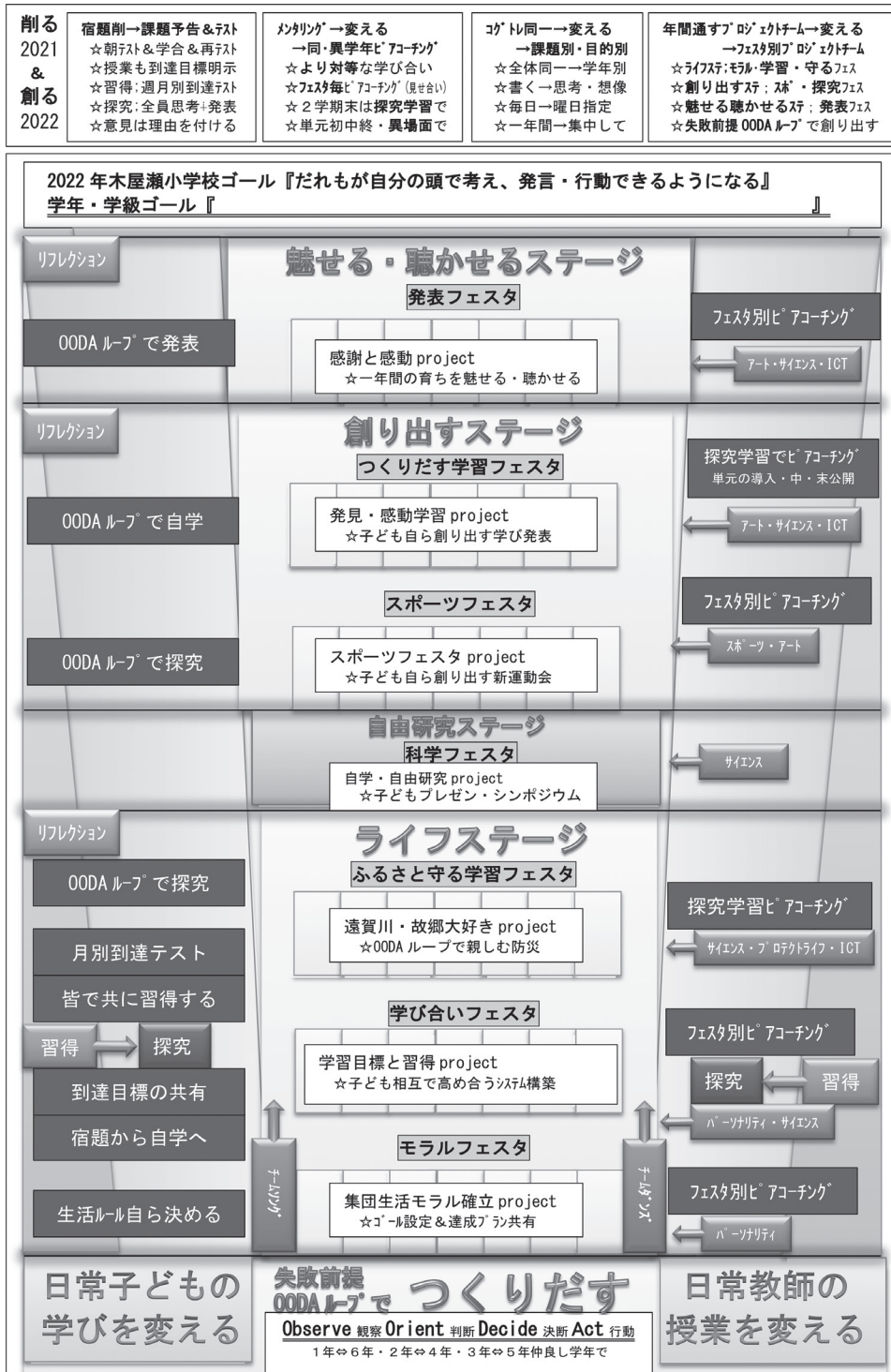
5.2 最後に：未来の学びのために

以上、本稿では、木屋瀬小学校の事例を通じて、コロナ禍に対する学校現場の対応、その中で起こった子どもたちの変化、そしてこれからの教育のあり方について検討してきた。本稿で木屋瀬小学校を取り上げたのは、同校がコロナ禍にて学校改革に取り組み、意義ある成果をあげてきたからである⁷⁾。木屋瀬小学校がコロナ禍でも学びをとめない挑戦の中で気づいたのは、子どもたちの主体的活動を実現させることの重要性であった。それは、これからの学校教育のあり方を示すものでもあったと言える。大きな社会変動が日常になりつつある今、子どもたちが未来を生きるためには様々な課題を乗り越えていく必要があり、そのためには主体的で柔軟な問題解決力が求められる。そして、それは学校という場において育まれるべきものであり、そのために学校は行事や授業のあり方を問い続け、絶えず変革を継続していかなければならない。木屋瀬小学校の挑戦は、その意義を我々に教えるものであったと言えるのである。

現在、木屋瀬小学校では新たな教育計画を策定している。「OODA ループで創り出す学校（Observe 状況把握、Orient 判断、Decide 決定、Act 行動）」（図1）というコンセプトを軸として、月・学期ごとに子どもたち主体のプロジェクトを立ち上げ、チームで試行錯誤しながらゴールを目指す活動を行っていくというものである⁸⁾。同時に教師たちも、プロジェクトの指導や授業の取り組みを見せ合い、互いに学び合うメンタリングを発展させたピアコーチングの手法を用いて授業改善を行っていく⁹⁾。木屋瀬小学校がコロナ禍での経験を通して究明してきた子どもたちの未来につながる学校、つまり、学ぶ過程を重視した非認知的能力の育成を目指す学校の実現に向けた挑戦が続けられていくことになるのである。

いま我々は予測困難な時代を生きている。未来はさらに不透明であり、そこに向かう子どもたちにとっての前途は多難である。今回のコロナ禍のような困難に直面さざるを得なくなった時、教科書に書かれた答えはなく、子どもたちは自らゴールを設定し、それを見据えたうえで適切な対応と新しい価値を創造しなければならない。そこでは、自ら考え、決定し、行動する力が必要であり、学校はまさにそうした力を育むための教育をしなければならない。それが輝かしい未来を生きる子どもたちに求められる教育であり、学校はそれをとどけるための場所であるべきなのである。今回のコロナ禍と木屋瀬小学校の取り組みは、そのことを我々に示すものであったと言えるのである。

図 1 木屋瀬小学校「つくりだすプラン 2022」



注

- 1) ただ、2ヶ月も休校期間が続くことで児童の健康状態や学習状況などが懸念され、2020年5月8日に5月18日以降の登校日が設定された。登校は分散登校が想定され、木屋瀬小学校でも5月18日から20日までの3日間に分散登校が実施された。
- 2) 一方で、コロナ禍での学校再開に伴い様々な課題が生じたことも明らかになっている。具体的には、従来と同じように授業を進めることが難しくなった。そもそも40人教室で「密」を回避することが困難であった。
- 3) 他にもオンラインでできる交流イベントなどは積極的に実施したり、運動会も実施形態を大幅に変更するなどして開催された。もちろん感染リスクや授業時間の確保などを考慮して中止にする行事もあった。
- 4) 川崎（2021）による調査アンケート結果。今回のコロナ禍によって家庭環境が不安定になり、それによって困難な状況になるケースもあったのは様々な媒体によって指摘されているところである。
- 5) 例えば、運動会当日も障害物競走する6年生のために1年生が競技中の道具の出し入れを行ったり、2年生が4年生のために演技中、自ら考え応援や手伝いを行ったりした。
- 6) トライ&エラーの繰り返しによって得られた子どもたちの成長であり、それは観覧していた保護者にも伝わり感動を与えた。のちに回収した子どもと保護者のアンケート結果によると、この改革に肯定的な回答を示した者は99.4%だった。
- 7) 実際、木屋瀬小学校は令和3年度、つまりコロナ禍の年度において、北九州市教育委員会から「優れた教育活動等実践教職員等表彰」（一般表彰・団体）を受けている。
- 8) 具体的に言うと、4月はお互いに学びを深めるためのモラルについて、5月は宿題から主体的学習や自学プロジェクトへの移行について取り組む。さらに6月からは防災フェスタ、科学フェスタ、そして2学期のスポーツフェスタ、探究フェスタ、3学期の学びフェスタに向けてプロジェクトチームを立ち上げ、活動を行っていくことになる。最終的なゴールは「誰もが自分の頭で考え発言・行動できる子ども」の育成である。
- 9) 子どもたちの主体的な授業を実現する授業改革として、2学期は探究的な学習について授業研究を行い、3学期の学びフェスタでの子どもの主体的発表につなげていく。

参考文献

- 樋口万太郎・堀田龍也編著（2020）『やってみよう！ 小学校はじめてのオンライン授業』学陽書房。
- 香川 貴志・原田 勝之・桑名 良幸・北村 慎朗・高橋 詩穂・江川 眞美・二谷 和恵（2021）「COVID-19（新型コロナウイルス感染症）拡大による臨時休校措置の解除後における小学校教育の始動過程—京都教育大学附属桃山小学校の場合—」教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要 第3号 pp.85-94。
- 川崎雅和編（2021）『コロナと闘う学校—全国120校が直面した課題と新たな教育環境の

可能性』学事出版。

リチャーズ, チェット (2019) 『OODA LOOP (ウーダグループ) 一次世代の最強組織に進化する意思決定スキル』原田 勉訳 東洋経済新報社。

田中智輝・村松 灯・高崎美佐編 (2021) 『学校が「とまった」日ーウィズ・コロナの学びを支える人々の挑戦』中原 淳監修 東洋館出版社。